

第2章 音韻の概略

この章では、スンバワ語の音韻の概略を述べる。構成は以下のとおりである。

1 音素

1.1 子音

1.2 半母音

1.3 母音

2 音節

2.1 音節の構造

2.2 形態素内、単語内の音節の分布

3 単語の強勢

3.1 強勢が消える場合（二つ以上の単語、小辞が構成する強勢の単位）

3.2 特に強い強勢を持つ単語

1 音素

1.1 子音

スンバワ語の子音は以下の17個である。本稿での表記は、インドネシア語の正書法および慣習に従う。以下の表では、転写に用いる文字とIPAの表記が異なる場合、後者を括弧内に付記した。

表2-1 子音

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p / b		t [t ^h]	d		k / g	
鼻音	m			n	ny [ŋ]	ng [ŋ]	
ふるえ音				r			
摩擦音		f		s			h [h]
破擦音					c [tʃ] / j [dʒ]		
側面接近音				l			

口音の閉鎖音は、すべて、有声音と無声音の対立を持つ。ただし、*t*と*d*は、調音点が異なる。*t*は歯音[t^h]、*d*は歯茎音[d]である。

声門摩擦音*h*は、マレー語、またはアラビア語（コーラン）からの借用語にのみ確認される¹。例は以下のとおりである。借用元の形と形が異なる場合は、借用元の形をカッコに入

1 スンバワ語は、マレー語と多くの語根を共有している。マレー語は、スンバワ語と同系統（オーストロネシア語族、マレヨ＝ポリネシア語派）の言語であるため、一般に、共有されている単語の多くは、祖語において既に共有されていた単語なのか、後に借用によって共有されることになった単語なのか明らかではない。しかし、(i) スンバワ語の単語中、マレー語との共有語でない単語に*h*音を含むものがないこと、また、(ii) 共有語で、かつ、*h*音を含むマレー語と対応するスンバワ語の中にも*h*音を含まないものが多数あるということから、スンバワ語固有の音韻体系

れて示す。

・マレー語からの借用：*hubungan*「関係」、*tahan*「我慢する」、*hawa*「気候」、*hukóm*「罰」(<*hukum*)

・アラビア語（コーラン）からの借用（人名等の固有名詞がほとんどである）：

Rahma「ラフマ」、*Ahmat*「アフマツ」(<*Ahmad*)、*anó-Ahad*「日曜」

唇歯音 *f* はごく少数のアラビア語起源の借用語にのみ確認されている。

データ中の例：*fakta*「事実」、*sifat*「性質」

そのほかの子音のうち、硬口蓋を調音点とする三つ（破擦音 *c* と *j*、鼻音 *ny*）は *h*, *f* を除く他の子音と比べて出現頻度が低い²。

1.2 半母音

半母音には *w*（有声両唇・軟口蓋接近音）と *y*（有声硬口蓋接近音）がある。

w, *y* の出現頻度は他の母音、子音と比べると低い³⁴。

に *h* 音は存在しないと考えられ、上記の *h* 音を含む語は、比較的最近のマレー語からの借用語である可能性が高いと考えられる。

(ii) の例（共有語に関して、マレー語には *h* 音が含まれ、スンバワ語には含まれない例）をいくつか挙げる。

マレー語	スンバワ語	意味
<i>hidung</i>	<i>idóng'</i>	鼻
<i>tahun</i>	<i>tén</i>	年
<i>hati</i>	<i>até</i>	心、肝臓
<i>hujan</i>	<i>ujan</i>	雨
<i>nikah</i>	<i>nika</i>	結婚する

2 おおよその出現頻度を把握するために、語彙集に掲載した単語約 2000 語における出現回数を数えたところ、各子音の出現回数は以下のとおりであった。語彙集には少なからず語根の重複も見られるが、そのような重複に関しては考慮せずに数えたため、下記の数字は正確なものではないが、硬口蓋を調音位置とする子音の出現頻度が極端に低いことは明らかである。

半母音 *w* 58, *y* 52

母音 *a* 2533, *e* 681, *i* 533, *é* 411, *è* 353, *u* 582, *ó* 315, *o* 401

子音 *p* 522, *b* 411, *t* 877, *d* 319, *k* 697, *g* 727, *m* 524, *n* 720, *ny* 32, *ng* 580, *r* 671, *l* 635, *s* 683, *h* 48, *c* 74, *j* 107

3 *w*, *y* のおおよその出現頻度については、註 2 を参照されたい。

4 *w* 音を含む単語は多くが対応するマレー語の単語を持つ。その場合、スンバワ語の *w* は、マレー語の *w* 音に対応している場合と、*b* 音に対応している場合がある。

・ スンバワ語 *w* = マレー語 *w*

スンバワ語	マレー語	意味（スンバワ語とマレー語で同じ場合）
<i>awan</i> 「空」	<i>awan</i> 「雲」	
<i>hawa</i>	<i>hawa</i>	「空気、気候」
<i>bawa</i>	<i>bawa</i>	「運ぶ」
<i>bawa'</i>	<i>bawah</i>	「下」
<i>sawét</i>	<i>sawit</i>	「菜野菜の一種」

2.1 音素

後舌母音 *u, ó, o* と前舌母音 *i, è, é, a* の間には *w* 音が、前舌母音 *i, è, é* と母音 *u, ó, o, a* の間には *y* 音が渡り音として観察される。*y* 音も *w* 音も、後続する母音が閉音節を形成する場合、特に明確に聞こえる。この違いは、たとえば、*bo-a*⁵ 「口」と *bo-at* 「仕事」の二単語の発音の比較において明確である。

スンバワ語話者は、この種のわたり音を表記することを好むが、本稿では表記しない。

1.3 母音

u, ó[o], o[□], e[e], a, i, é[e], è[□] の 8 母音がある。

表 2-2 母音

<i>liwat</i>	<i>liwat</i>	「通りすぎる」
<i>warna</i>	<i>warna</i>	「色」
<i>lawang</i>	<i>lawang</i>	「扉」
<i>ketawa'</i>	<i>ketawa</i>	「笑う」

・スンバワ語 *w* = マレー語 *b*

スンバワ語	マレー語	意味
<i>biwér</i>	<i>bibir</i>	「唇」
<i>bawi</i>	<i>babi</i>	「豚」

対応するマレー語の単語を持たないものもある。

(例) *nawar* 「明日」、*rawi* 「夕方」、*béwé* 「枝」、*siwa'* 「9、九」、*sawét* 「撒き散らす」

y を含む単語の多くは、対応するマレー語の単語を持つ。スンバワ語の *y* 音は、マレー語の *y* 音に対応している場合と *j* 音に対応している場合がある。

・スンバワ語 *y* = マレー語 *y*

スンバワ語	マレー語	意味
<i>ayam</i>	<i>ayam</i>	「鶏」
<i>kayu'</i>	<i>kayu</i>	「木」
<i>caya</i>	<i>caya</i>	「光」
<i>payóng</i>	<i>payung</i>	「かさ」
<i>goyang</i>	<i>goyang</i>	「揺れる」
<i>baya</i>	<i>bahaya</i>	「危ない」

・スンバワ語 *y* = マレー語 *j*

スンバワ語	マレー語	意味
<i>tayam</i>	<i>tajam</i>	「(刃物などが)鋭い、鋭利な」

対応するマレー語の単語を持たないものもある。

(例) *buya* 「さがす」、*poyong* 「包む」

5 スンバワ語の単語はすべて語末の母音に強勢を持つが、単語によってはこの強勢が他の単語より強く現れるものがある。そのような単語には語末に' (アポストロフィ) を付けて示す。単語の強勢についてはこの章の 3 で述べる。

2.1 音素

Close	<i>i</i> [i]		<i>u</i> [u]
Close Mid	<i>é</i> [e]	<i>e</i> [ə]	<i>ó</i> [o]
Open Mid	<i>è</i> [ɛ]		<i>o</i> [ɔ]
Open		<i>a</i> [a]	

後舌母音*u, ó, o*は、いずれも円唇母音である。前舌母音*i, é, è*は、いずれも唇の左右の強い引きを伴う⁶

2 音節

2.1 音節の構造

音節の構造は以下のとおりである。

CCVC [Cは子音、Vは母音]

このうち、音節に必須の要素はV(単一の母音)のみである。

閉音節における母音と子音の分布

閉音節においては、以下のような母音と子音の分布がみられる。

・音節末に現れうる子音は、無声閉鎖音すべて、および鼻音のうち*m, n, ng*、さらに*s*および*l*と*r*(つまり*p, t, k, m, n, ng, r, s, l*)である。有声閉鎖音*b, d, g*および有声摩擦音*j*、無声音のうち*f, c, h*、鼻音のうち*ny*は音節末には現れない。

6 Mahsun (1990)は閉音節における半狭前舌母音*é*、半狭後舌母音*ó*をそれぞれ*i*と*u*の異音とみなしている。Mahsun ははっきり述べていないが、これはおそらく、スンバワ語においては語末の閉音節に狭母音*i, u*が現れないこと、また、半狭母音を持つスンバワ語の単語に対応する単語がマレー語に存在する場合は、スンバワ語の*é, ó*がそれぞれマレー語の*i*と*u*に対応しているためであろうと推測される。以下に例を挙げる。

スンバワ語	マレー語	意味(共通の場合)
<i>angén</i>	<i>angin</i>	「風」
<i>jaréng</i>	<i>jaring</i>	「網」
<i>tepóng</i> 「菓子」	<i>tepung</i> 「粉(小麦粉など)」	
<i>tanók</i>	<i>tanduk</i>	「角」
<i>inóm</i>	<i>minum</i>	「飲む」

しかし、共時的には、この位置の半狭母音*é*音と*ó*音に関して、狭母音*i*音と*u*音の異音であるものと、本来半狭母音であるものとの音声的区別はできない。Mahsun の分析は、本来この位置には半狭母音は現れないという仮説によるものであるが、そのような仮説には根拠がない。上記のような対応は、スンバワ語では、後述するように閉音節に狭母音が現れないという原則があるために生じたと考えるのが妥当であろう。

2.2 音節

前舌母音のうち、*i*は閉音節には現れない⁷。また、*è*は、原則として、歯音、歯茎音 (*t, n, r, s, l*)で終わる閉音節には現れない⁸。

後舌母音のうち、*u*は閉音節には現れない⁹。また、*ó*は原則として、歯音、歯茎音 (*t, n, r, s, l*)で終わる閉音節には現れない¹⁰。さらに、*o*は、歯音、歯茎音 (*t, s, n, l, r*)で終わる閉音節に加えて唇音*m, p*で終わる音節にも原則として現れない¹¹。

子音連続

1つの音節中、子音連続を構成する組み合わせは次の二種類に限られている。

(i)閉鎖音 + *l* または *r*

例：*blé* 「蛇」、*tri* 「落ちる」、*mlèng* 「起き上がる」

(ii)調音位置が同じ閉鎖鼻音と閉鎖口音の組み合わせ

データ中、四例しか確認されていない

例：*ndé* 「おじ、おば」、*mpa* 「肉」、*mpat* 「四」、*ntén* 「ひざ」

2.2 形態素内、単語内の音節の分布

形態素（語根、接辞、小辞）の音節数

この言語の形態素は統語的、形態的基準から、語根、接辞、語根でも接辞でもない要素（アスペクト辞、モダル辞、叙法辞など）に分類することができる。（分類の基準については第4章1で述べる。）

7 註6に例を示したように、マレー語との共有語根において、マレー語で*i*を含む閉音節が現れている場合、対応するスンバワ語では*é*を含む閉音節が現れている。

8 例外として、以下の単語がある。すべてマレー語との共有語彙で、指示内容などからいずれも近年の借用であると考えられる。

gerangèt 「指」、*ès* 「氷」、*Marèt* 「三月」、*mètèr* 「メートル」、*setèl* 「セット」、*sèt* 「セット」、*kabupatèn* 「行政単位の一つ、カブパテン」、*losmèn* 「宿屋」、*dikès* 「保健所」、*polindès* 「病院」、*bènsèn* 「ガソリン」、*karèt* 「ゴム」、*karpèt* 「カーペット」、*cèpèr* 「トレイ」、*èmbèr* 「桶」、*polpèn* 「ボールペン」、*cèt* 「ペンキ」、*jam-bèkèr* 「目覚まし時計」、*rèl* 「レール」、*mencerèt* 「下痢をする」、*protès* 「抗議する」

9 註6に例を示したように、マレー語との共有語根において、マレー語で*u*を含む閉音節が現れている場合、対応するスンバワ語では*ó*を含む閉音節が現れている。

10 以下の例外がある。これも、すべてマレー語との共有語彙で、近年の借用語であると考えられる。

usós 「特別の」、*urót* 「順序」、*stasiòn* 「駅」、*pantón* 「韻文」、*cukór* 「剃る」、*unggól* 「最高の」、*pengecót* 「臆病な」

11 以下の例外がある。これもすべてマレー語との共有語彙で、近年の借用であると考えられる。

nomor 「数字、～番」、*kartu-pos* 「郵便はがき」、*obor* 「トーチ」、*motor* 「自動車」、*sepèda-motor* 「バイク」、*bocor* 「漏れる」

語根は原則として二音節からなる。一音節の語根は数が少ない。

語彙集に掲載した単語のうち番号 1-1000 に属するものについて調べたところ、約 1000 語中、1 音節語は 27 語である。この 27 語のうち、11 語は対応するマレー語の単語を持つ。このうち、7 語はマレー語では 2 音節語であり、本来は 2 音節語であったと考えられる。残りの 4 語はマレー語でも 1 音節語である。

・対応するマレー語を持つもの。カッコ内にマレー語の対応する形を示す。

lét (*laut*) 「海」, *tén* (*tahun*) 「年」, *lén'* (*lain*) 「異なる」
jét (*jahit*) 「縫う」, *do'* (*jauh*) 「遠い」, *to'* (*tahu*) 「知っている」, *pét* (*pahit*) 「苦い」
nya (*nya*) 「三人称代名詞」, *tè* (*téh*) 「茶」(中国語からの借用)
pas (*pas*) 「ぴったりである」, *hal* (*hal*) 「事柄」

・対応するマレー語の単語がないもの

nè 「足」, *nat* 「うみ」, *mè* 「ごはん」, *blè'* 「へび」, *sét* 「かむ」
rék 「踏む」, *krat* 「刈る」, *sat* 「むすぶ」, *lés* 「出る」
lè' 「長い(時間が)」, *yè'* 「はい(肯定の返事)」, *ban* 「板」
tó' 「今、それ」, *ta* 「これ」, *nan* 「それ」, *mé* 「どれ」

また、3 音節の語根の割合も少ない。巻末の単語 1-1000 中、3 音節語は 122 語である。

接辞は、接頭辞のみで、接尾辞、接中辞はない。ほとんどすべてが、母音 *a* か *e* を含む一音節から成る。例外は自動詞を形成する鼻音接頭辞で、付接する語基の語頭音によっては、語頭音と、語頭音と調音位置が同じ鼻音との交代という形で実現される。接頭辞の一覧を以下に示す。接頭辞の機能については第 4 章で述べる。(第 4 章内においてそれぞれの接頭辞の記述を行う個所をカッコ内に入れて示す。)

接頭辞の一覧

[1] 他動詞を派生する接頭辞

・ *sa-* (例: *sa-teri'* 「落とす」 < *teri'* 「落ちる」) (2.1.1)

[2] 自動詞を派生する接頭辞

・ 鼻音接頭辞 *N-* [*N*の現れ方については第 4 章の 2 で述べる。] (2.1.2)

(例: *mongka'* 「ご飯を炊く」 < *bongka'* 「ご飯を炊く」)

・ *bar-* (例: *bar-itóng'* 「勘定をする」 < *itóng'* 「数える」) (2.1.3)

・ *ka-/geN²-* [*N²*の現れ方については第 4 章の 2 で述べる。] (2.1.4)

(例: *ka-susa'* 「心配する」 < *susa'* 「大変だ」, *gem-panas* 「暑がる」 < *panas* 「暑い」)

[3] 名詞を派生する接頭辞

・ *ka⁻¹* (例: *ka-guru* 「かつての先生」 < *guru* 「先生」) (2.1.6)

・ *ka⁻²* (例: *ka-tokal* 「居場所」 < *tokal* 「座る」) (2.1.7)

2.2 音節

・ *paN-* (例: *pangeto'* 「知識」 < *to'* 「知る」) (2.1.8)

・ *sa-* (例: *sa-tau* 「一人」 (< *tau* 「人」)) (2.1.9)

[4] 副詞を派生する接頭辞

・ 接頭辞 *sa-* (*sa-puan* 「昔」 (< *puan* 「明後日」)) (2.1.10)

語根でも接辞でもない要素 (小辞など) には以下のものがある。(次章以降の参照箇所をカッコ内に示す¹²。)

語根でも接辞でもない要素の一覧

[1] 名詞句内に現れるもの

・ 人を指す固有名詞に付接し、その性別を示す小辞 (第5章 2.2)

nya 男性 (三人称代名詞と同形)

si 女性、ただし、話し手が女性である場合は、男性を表す固有名詞にも用いる。

・ 名詞節形成詞 *adè* (縮約形 *dè=*) (第5章 8.1), *lók* (第5章 8.2)

・ 人称辞 (第5章 2.3) (人称辞は、[3]の述部内にも現れる。(第5章 6.2))

・ 属格人称詞 (第5章 2.3)

[2] 前置詞 *pang'/N* (場所), *kó'/lakó'* (方向) など (第5章 4)

[3] 述部を構成するもの

・ アスペクト・モダル辞 *ka* 「完了」, *ya* 「先行する状況との結びつき」, *ma* 「願望」
na 「ある状況が成立しないことへの願望」 (第5章 6.2), (第6章 1)

・ 否定詞 *nó*, *siong'* (第5章 10.1), (第6章 2)

・ 連用詞 *laló'*, *benar* (いずれも動詞のあらゆる性質の程度がはなはだしいことを示す。

例: *kotar=laló'* 「速すぎる」, *kotar=benar* 「本当に速い」) (第5章 6.2)

[4] 文成分 (述部、補語、副詞成分) の後や文末に現れるもの

・ 限定詞 *baè* 「～だけ」 (第5章 10.2)

・ 叙法辞 *ké'* 「不確定」, *mo* 「起動・妥当」, *po* 「必要な条件」, *si* 「対比」 (第5章 10.3, 第7章)

[5] 接続詞 (第8章 6)

léng/apa 「理由」, *lamén* 「仮定」, *kelé* 「逆接」, *muntu* 「～のときに」, *beru'* 「～の直後に」 など

これらの要素は多くが1音節であるが、2音節のものもある。(前置詞の一部は2音節である。また、連用詞、限定詞は2音節である。さらに、接続詞は2音節のものが多い。)

12 本記述では、本文中の別の箇所を参照する場合、とくにことわりがない限り、参照箇所が同一章内にある場合は章番号を省略し、参照箇所が別の章内にある場合は章番号と章内の該当箇所をたとえば「第1章 1.1」というふうに示す。

閉音節の分布

閉音節は多くの場合語根末に現れる。閉音節が語根末以外の位置に現れるのは、原則として、その音節が鼻音で終わっていて、しかも後続する音節の先頭が、その鼻音と調音位置を同じくする無声閉鎖口音である場合に限られている¹³。

例： *kompó* '太っている', *mentua*¹⁴ '配偶者の親'

上の原則の例外として、以下の語根がある。ほとんどがマレー語からの借用語である。スンバワ語と類似の制約がマレー語にもあるため、以下の借用語の多くは、マレー語も他の言語から取り入れたもの、またはマレー語において接辞を含む形がスンバワ語では語根として取り入れられたものである。以下の例では、スンバワ語の形とマレー語の形が同形である場合はそのまま示し、異なる場合はカッコ内にマレー語の形を示す。

[1] マレー語の接辞を含むもの

per-kakas '道具', *berma* ' ~と一緒に' (<マレー語: *ber-sama* ' ~と一緒に'),

[2] 第三の言語を起源とし、マレー語経由で借用されたと考えられるもの

サンスクリット起源 *warna* '色', *merpati* '鳩'

ポルトガル語起源 *pèsta* 'まつり'

アラビア語起源 *Saptu* '土曜'

オランダ語起源 *Septèmbèr* '九月'

[3] マレー語からの借用語のうち[1]にも[2]にもあてはまらないもの

bersi '清潔である' (<マレー語: *bersih* '清潔である')

また、直接対応するマレー語を持たない例として *sermén* '集める' と *celti* 'ドラム' がある。このうち *sermén* '集める' は、 [1] に属するマレー語起源の単語 *berma* ' ~と一緒に' に、スンバワ語固有の接辞 *sa-* が付接した形 *saberma* に由来するものと推察される。

13 類似の制約がマレー語にも見られる。ただし、マレー語においては、後続する子音は有声閉鎖音でもよい。共有語根中、マレー語において後続子音が有声音である例には、*péndék* '短い', *dinding* '壁' などがある。これに対応するスンバワ語の語根は、後続する有声音が脱落した形 *péné'*, *dinéng* となっている。

第1章で述べたように、この民族、言語の名称は他称(マレー語の形)が Sumbawa であるのに対して、自称(スンバワ語の形)は Samawa' である。自称の形 Samawa' では、他称の形 Sumbawa の2音節目の語頭の有声音が脱落している。これはこの言語が許容する語根の音節の構造に沿う形での音韻変化の結果であると考えられる。(1音節目の母音の違いは、後で述べるように、スンバワ語では、後ろから数えて3音節目の母音は *a* または *e* に限られるという原則と関係があるものと思われる。)

14 この単語に対応するマレー語の単語は、*mertua* である。これはスンバワ語に借用される際に、スンバワ語で許容される単語内での子音連続の規則に従う形で音交替が起こったものと推測される。

連続して現れうる母音の組み合わせ

以下に示すように、語根中、母音が連続して現れる場合がある。連続して現れうる母音の組み合わせには以下のものがある。

- ・ *a* ではじまるもの： *ai* (*ai*' 「水」), *aé* (*kaét* 「編む」), *aè* (*baèng*' 「持ち主」)
ao (*ao*' 「はい(肯定の返事)」), *aó* (*laó*' 「ゆっくりとした」)
au (*au* 「灰」)
- ・ *i* ではじまるもの： *ia* (*sia* 「あなた」), *iè*' («はい(肯定の返事)」), *io* (*pio* 「鳥」)
ió (*sió*' 「かくす」)
- ・ *è* ではじまるもの： *èi* (*Mèi* 「五月」), *èa* (*rèa*' 「大きい」)
- ・ *o* ではじまるもの： *oè* (*setoè*' 「部分」), *oa* (*boa*' 「口」)
- ・ *ó* ではじまるもの： *óé* (*róé* 「子孫、先祖」)
- ・ *u* ではじまるもの： *ué* (*puén* 「木」), *uè* (*tamuè* 「客」), *ua* (*bua*' 「果物」)

中舌母音 *e* を含む母音連続、*é* ではじまる母音連続、および後舌母音どうしの連続は今のところ確認されていない。

また、次の連続も今のところ確認されていない。

ié, iu, èé, èo, èó, èu, oi, oé, ói, óè, óa, ui

上記に示した語根中の母音の連続に関して、二つの母音が一つの音節を形成していると考えられる音声的、音韻的根拠は特にない。たとえば、3 で扱う単語の末母音に置かれる強勢は、以下のような母音の連続においては、後の方の母音にのみ置かれる。(たとえば、最初に挙げた例 *ai*' 「水」においては、二つ目の母音 *i* にのみ強勢がおかれる。)このような場合は母音間に音節境界があると考えられる。

語根内における母音の共起制限

一つの語根内において、最初の母音が半狭母音 *é* または *ó* である場合、後続する母音としてそれより広い母音が現れる例は見られない。つまり、二音節の語根において、第一音節が母音 *é, ó* のいずれかを含む場合、第二音節が *è, o, a* を含むことはない。

三音節以上の語根の第一母音

三音節の語根は、一部の例外を除いて、最初の音節の母音が *a* または *e* である¹⁵。

15 例外として、次の語根がある。*soai*' 「妻」を除いては、明らかにマレー語からの借用語である。

cuaca 「気候」, *dunia* 「世界」, *Nopèmbèr* 「11月」, *Dicèmbèr* 「12月」, *Octobèr* 「10月」

2.2 音節

三音節以上の単語には、三音節の語根がそのまま単語として用いられるものと、二音節以上の語根に接頭辞が付いたものがある。上述したように、接頭辞は一つの例外（鼻音接頭辞）を除いてすべて *a* か *e* を含む一音節の形を持つため、接頭辞が二音節以上の語根に付いた場合、最初の音節の母音は *a* または *e* 音となる。このため、三音節以上の単語は、それが接辞のついた形である場合もそうでない場合も、一部の例外を除いて、すべて末尾から数えて三つ目以前の母音（三音節語では最初の音節の母音、四音節語では最初の母音と次の母音）が *a* または *e* として現れる。

3 単語の強勢

単語は最終音節の母音に強勢を持つ。強勢のある母音は強く、また長く発音される。例えば、単語 *balé* 「家」においては、最後の母音 *é* が先行する母音 *a* より強く、また長めに発音される。

3.1 強勢が消える場合（二つ以上の単語、小辞が構成する強勢の単位）

二つ以上の単語の連続において、最後の要素以外の単語の強勢が失われることがある。例えば、名詞 *balé* 「家」を動詞 *beru'* 「新しい」が修飾して名詞句を構成する場合、名詞句 *balé=beru'* の中で、強勢は、後続する単語 *beru'* にもみ置かれ、先行する単語 *balé* は、強勢を伴わないで発音される。本記述では、このような単語の連続を「強勢の単位」と呼び、等号 (=) で結んで表示する。

強勢の単位が構成される条件には以下のものがある。

[A] 名詞句内の強勢の単位

名詞が動詞、副詞、指示詞、固有名詞に直接修飾される場合、名詞と修飾成分と一緒に強勢の単位を形成する。(1)に動詞が修飾成分である例、(2)に副詞が修飾成分である例、(3)に指示詞が修飾成分である例、(4)に固有名詞が修飾成分である例を示す。

- (1) *lamong=mira*
clothes red 「赤い服」
- (2) *pipés=sapèrap*
money=yesterday 「昨日のお金」

lukisan 「彫刻」_⊥ *utara* 「北」_⊥ *soai'* 「妻」

2.3 単語の強勢

(3) *lamong=ta*
clothes this 「この服」

(4) *tau=Jepang*
person=Japan 「日本人」

また、名詞が一人称人称詞に修飾される場合、人称詞の数、スタイルを問わず、所有者を表す代名詞とそれに修飾される名詞は強勢の単位を形成する。(5)-(9)に例を示す。

(5) *anak=kaji*
child=1SG.HIGH 「私の家」

(6) *anak=kaku*
child=1SG.GEN 「私（普通体）の子」

(7) *anak=kajulén*
child=1SG.NOBLE 「私（最敬体）の子」

(8) *anak=kita*
child=1PL.INCL 「私たち（包括形）の子」

(9) *anak=kami*
child=1PL.EXCL 「私たち（排除形）の子」

cf. その他の人称詞および名詞が修飾成分である場合、被修飾成分と修飾成分は別々の強勢を持つ。(10)-(13)に例を示す。

(10) *anak kau*
child 2SG.LOW 「あなた（普通体）の子」

(11) *anak nènè*
child 2-3PL 「あなたがたの子」

(12) *anak nya*
child 3 「彼の子」

(13) *anak nya=Amén*
child title=Amin 「アミンの子」

2.3 単語の強勢

- (14) *anak guru*
child teacher 「先生の子」

[B] 動詞句内の強勢の単位

述部の主要部が他動詞で、その表す動作の対象が不定である場合、他動詞と動作の対象を表す要素は強勢の単位を形成する。

- (15) *aku inóm=kawa.*
1SGLOW drink=coffee 「私はコーヒーを飲む。」

また、他動詞を述部の主要部とする文が名詞節を形成する場合は、動作の対象は常に動詞と強勢の単位を形成する。(この場合、動作の対象の定、不定は関係ない。)

- (16) *adè inóm=kawa=nan.*
NOM drink=coffee=that 「そのコーヒーを飲む人」

3.2 特に強い強勢を持つ単語

単語の中には、語末の強勢が、他の単語より強く現れるものがある。本記述ではこの種の単語の語末にアポストロフィ(´)を付けて示す。

例：*barari*´ 「走る」、*tanam*´ 「植える」、*tata*´ 「ひたい」、*gera*´ 「美しい」

強勢の強弱で区別されるミニマルペアの例を以下に挙げる。

<i>sapu</i> 「掃く、ほうき」	<i>sapu</i> ´ 「男性のつける伝統的な髪飾り」
<i>kosong</i> 「ゼ口」	<i>kosong</i> ´ 「バナナの花芯」
<i>tunóng</i> 「焼く」	<i>tunóng</i> ´ 「眠る」
<i>siong</i> 「炒る」	<i>siong</i> ´ 「～でない(否定詞)」

第4章の2.2で述べるように、強い強勢の付加によって派生が行われる場合もある。

<i>soai</i> 「女、女の」	<i>soai</i> ´ 「妻」
<i>salaki</i> 「男、男の」	<i>salaki</i> ´ 「夫」
<i>kemang</i> 「花」	<i>kemang</i> ´ 「彫刻、絵などの装飾」
<i>godong</i> 「葉」	<i>godong</i> ´ 「バナナの葉」
<i>maté</i> 「死ぬ、死んでいる」	<i>maté</i> ´ 「乾いている」
<i>hukóm</i> 「法律」	<i>hukóm</i> ´ 「罰する」
<i>jagér</i> 「こぶし」	<i>jagér</i> ´ 「殴る」
<i>kubér</i> 「墓」	<i>kubér</i> ´ 「埋葬する」
<i>momat</i> 「積荷」	<i>momat</i> ´ 「荷物を積む」

二つ以上の単語が強勢の単位を形成する場合には、一般的な強勢と同様、この種の強勢も消失する。

特に強い強勢を持つ単語のうち、語末が開音節であるものは、母音が強い強勢をもって発音されるとともに、条件によって語末に下降音調、声門閉鎖音のいずれかが現れる。(以下の記述では下降音調を記号[^]で、声門閉鎖音を記号□で表す。)その条件には当該の単語が属する語類¹⁶と、その統語的位置が関係する。

まず、当該の単語が他動詞、副詞である場合は、常に下降音調が現れる。単語の聞き取り調査などで単独で発音される場合も下降音調を伴うし、(例：*gita*[^]「見る」(他動詞)、*laó-laó*[^]「ゆっくりと」(副詞))、文中に現れる場合も、その中での位置を問わず下降音調を伴う。

(17) *ya=ku=gita*[^]
 CONS=1SG.LOW.AFFIX=see 「私は(何かを)見ることにする。」

(18) *gita*[^] *tau=nan*.
 see person=that 「その人を見なさい。」

(19) *laó-laó*[^] *nya* *bakranté*.
 slowly 3 speak 「彼はゆっくり話す。」

(20) *nya* *bakranté* *laó-laó*[^]
 3 speak slowly 「彼はゆっくり話す。」

一方、他動詞、副詞以外の単語(自動詞、名詞)は、それが現れる統語的位置によって現れ方が異なる。

聞き取り調査などで、単独で発音される場合は声門閉鎖音を伴って発話される。また、文中では、次の二つの条件によって現れ方が異なる。

・その単語が単独で文の成分を構成する場合

第3章、第5章で詳しく述べるが、この言語の文の成分は、述部、補語、副詞成分にわけることができる。そのうち、自動詞が単独で構成しうるのは述部、名詞が単独で構成しうるのは述部および補語である。この場合、それぞれの成分が文末にある場合は、声門閉鎖音が、そうでない場合は下降音調が現れる。以下に、(i) 自動詞が単独で述部を構成する

16 本記述では、主な語類として名詞、動詞(自動詞、他動詞)、副詞を区別する。この言語における「用言」の下位区分として、統語的特徴から明確なのは、他動詞とそれ以外の区分だけである。動的な状況を表すものと静的な状況を表すものは明確な統語的違いを示さない。よって、本記述では動詞と形容詞は区別せず、他動詞以外の用言をすべて自動詞として扱う。よって、自動詞の中には、動的な状況を表すものだけでなく、静的な状況を表すものも含まれることになる。

場合¹⁷、(ii) 名詞が単独で述部として現れる場合、(iii) 名詞が単独で補語として現れる場合の順で例を示す。

(i) 動詞が単独で述部を構成する場合

この場合、述部の後に補語が現れる場合は、下降音調が現れ、述部が文末に現れる場合は、声門閉鎖音が現れる。(21)と(22)を対比されたい。

(21) *loka*[^] *tau=nan*.
old pesron=that 「その人は年をとっている。」

(22) *tau=nan* *loka* .
person=that old 「その人は年をとっている。」

(ii) 名詞が単独で述部として現れる場合

この場合も、述部の後に補語が現れる場合は、下降音調が現れ、述部が文末に現れる場合は、声門閉鎖音が現れる。(23)と(24)を対比されたい。

(23) *asu*[^] *dèan*
dog that 「それは犬だ。」

(24) *dèan* *asu* .
that dog 「それは犬だ。」

(iii) 名詞が単独で補語として現れる場合

特に強い強勢を持つ単語が単独で補語を構成する場合、述部に先行する場合は下降音調が現れ、述部に後続する場合は声門閉鎖音が現れる。

(25) *ina*[^] *tokal*
mother sit.down 「母親は座っている。」

(26) *tokal* *ina*
sit.down mother 「母親は座っている。」

・その単語が名詞句の一部である場合

17 第3章3.2で述べるように、動詞句には主要部の他に人称を表す要素、アスペクト辞、モダル辞、連用詞、限定詞、叙法辞などが含まれるが、人称を表す要素、アスペクト辞、モダル辞、限定詞、叙法辞は動詞の強勢の現れ方に影響を与えない。また、連用詞が動詞句内に現れる場合は、動詞の強勢は現れない。(この点については第5章の6.2を参照されたい。)よって動詞句内に主要部以外の要素が現れるかどうかは、ここで問題とする特に強い強勢の現れ方には影響しない。

2.3 単語の強勢

この言語の名詞句は(i) 単独の名詞からなるものと、(ii) 主要部 + 修飾成分という構成のものがある。(ii)のような名詞句において、自動詞は名詞句内の修飾成分として、名詞は名詞句の主要部および修飾成分として機能しうる。この場合、当該の自動詞または名詞が名詞句末に現れる場合は声門閉鎖音が現れ、そうでない場合は下降音調が現れる。名詞句は述部、補語など複数の文成分に表れうるが、当該の名詞句がどのような文成分を構成する場合もこのことがいえる。(名詞句の現れる統語的環境については第3章 1.3、第5章 1.3で、名詞句の内部構造については第3章 2.1、第5章 2で述べる。)

以下、上記の条件について、(iv)名詞が名詞句の主要部として現れ、修飾成分に先行する場合、(v)名詞または自動詞が名詞句の修飾成分として現れる場合の順に述べる。

(iv) 特に強い強勢を持つ名詞が名詞句の主要部に現れ、他の名詞に修飾される場合
 強勢を持つ名詞が名詞句の主要部に現れ、他の名詞に修飾される場合は下降音調が現れる。
 以下の部分では名詞句を[]で囲んで示す。

- (27) *gita*[^] [*asu*[^] *guru*].
 eat dog teacher
 「誰かが先生の犬を見る。」

(v) 単語が名詞句内の修飾成分として現れる場合

強勢を持つ単語が名詞句内の修飾成分として現れ、名詞句末に現れる場合は、声門閉鎖音が現れる。

- (28) [*tau=loka*] *tau=nan*.
 person=old person=old 「その人は老人である。」

- (29) *dèan* [*tai asu*].
 that feces dog 「それは犬のふんだ。」

当該の単語が同じように名詞句内の修飾成分として現れる場合でも、その単語の後に、さらに名詞または名詞節が修飾語として現れる場合は、下降音調が現れる。

- (30) [*tai asu*[^] *dè=teri*□]
 faces dog NOM=fall 「落ちた犬のふん」

- (31) [*asu=loka*[^] *guru*]
 dog=old teacher 「先生の年寄りの犬」

これまで述べたことから「特に強い強勢」の現れ方をさらに一般化すると、特に強い強制は、当該の単語が、自身が「単独で」構成する統語的単位のうち最も階層の高いものを

2.3 単語の強勢

直接支配する統語的単位中の末尾に位置する場合は声門閉鎖音が現れ、そうでない場合は下降音調で現れるのだと考えられる。

この仮定に沿って、それぞれの場合をみてみよう。以下の部分では文の成分を枝分かれ図で示す。

(21)-(25)に挙げた、当該の単語が単独で述部を構成する場合を再掲する。この場合、当該の単語が単独で構成する統語的単位のうち最も高い階層にあるのは「述部」である。この述部を直接支配する統語的単位は「文」である。(22)(24)のように、「文」の中で「述部」が最後に位置する場合は声門閉鎖音が現れ、(21)(23)のように、「文」の中で「述部」に後続する要素（補語）が存在する場合は下降音調が現れる。

(22) 文

	補語		述部
	名詞句		動詞句
主要部	修飾成分		主要部
<i>tau</i>	<i>nan</i>		<i>loka</i> .
person	that		old
「その人は年をとっている。」			

(24) 文

補語	述部	
名詞句	名詞句	
主要部	主要部	
<i>dèan</i>	<i>asu</i> .	
that	dog	「それは犬だ。」

(21) 文

述部	補語	
動詞句	名詞句	
主要部	主要部	修飾成分
<i>loka</i> ^	<i>tau</i>	<i>nan</i> .
old	person	that
「その人は年をとっている。」		

(23) 文

述部	補語	
名詞句	名詞句	
主要部	主要部	
<i>asu</i> [^]	<i>dəan</i>	
dog	that	「それは犬だ。」

名詞が単独で補語を構成する場合も同様のことがいえる。(25)(26)において、当該の単語が単独で構成する統語的単位のうち最も高い階層にあるのは補語である。補語を直接支配する統語的単位はこの場合も「文」である。(25)のように「文」において補語に後続する要素がある場合は下降音調が、(26)のようにそうでない場合は声門閉鎖音が現れる。

(25) 文

補語	述部	
名詞句	動詞句	
主要部	主要部	
<i>ina</i> [^]	<i>tokal</i>	
mother	sit.down	「母親は座っている。」

(26) 文

述部	補語	
動詞句	名詞句	
主要部	主要部	
<i>tokal</i>	<i>ina</i> □	
sit.down	mother	「母親は座っている。」

次に当該の単語が名詞句の一部である例をみてみよう。

(27)では、特に強い強勢を持つ名詞が名詞句の主要部に現れ、他の名詞に修飾されている。この場合、当該の単語が単独で構成する唯一にして最も階層の高い統語的単位は「名詞句の主要部」であり、それを直接支配する統語的単位は「名詞句 (=補語)」である。ここでは、名詞句内で、当該の単語に後続する要素があるため、下降音調が現れていると考えられる。

(27) 文

述部	補語	
動詞句	名詞句	
主要部	主要部	修飾成分
<i>gita</i> [^]	[<i>asu</i> [^]	<i>guru</i>].
eat	dog	teacher

「(誰かが)先生の犬を見る。」

次に、強勢を持つ名詞が名詞句内の修飾成分として現れている例として(28)と(29)を再掲する。いずれの場合も、当該の単語が形成する唯一にして最も階層の高い統語的単位は「修飾成分」である。この「修飾成分」を直接支配するのは、名詞句である。(28)のように名詞句内で当該の要素に後続する要素(他の修飾成分)が存在しないときは声門閉鎖音が、(29)のように名詞句内で当該の要素に後続する要素(他の修飾成分)が存在するときは下降音調が現れる。

(28) 文

述部		補語	
名詞句		名詞句	
主要部	修飾成分	主要部	修飾成分
[<i>tau</i>	<i>loka</i>]	<i>tau</i>	<i>nan</i> .
person	old	person	old

「その人は老人である。」

(29) 名詞句

主名詞	修飾成分	修飾成分
[<i>asu</i>	<i>loka</i> [^]	<i>guru</i>]
dog	old	teacher

「先生の年寄りの犬」

以上みてきたことから、当該の単語が自動詞または名詞である場合、その強勢の現れ方は、上に述べた原則で説明できる。つまり、当該の単語が、それが単独で構成する統語的単位のうちもっとも高い階層にあるものを直接支配する統語的単位内の末尾に現れる場合は声門閉鎖音が、そうでない場合は下降音調が現れる。

機能の面から考えると、この強勢の現れ方は、当該の単語の箇所で統語的単位が切れるのかそうでないのかを表し分けているといえる。

既に述べたように、他動詞、副詞は常に下降音調で現れる。これは、この二つの要素が典型的に現れる統語的位置の影響によると考えられる。

まず、他動詞についてみてみよう。他動詞は典型的には述部の主要部として現れる¹⁸。

例文として、上に挙げた(17)(18)を再掲する。他動詞が形成する述部は(17)のように文末に現れる場合もあるが、典型的には(18)のように動作の対象を表す補語の前に現れる。(他動詞構文における各要素の生起順については第5章の6.3で述べる。)

(17) *ya=ku=gita^*
 CONS=1SG.LOW.AFFIX=see 「私は(何かを)見ることにする。」

(18) *gita^* *tau=nan.*
 see person=that 「その人をみなさい」

それゆえ、他動詞は、多くの場合、「それが単独で構成する統語的単位のうち最も階層の高いもの」(述部)を直接支配する統語的単位(文)において、後続する要素(補語)を持つことになる。このことを枝分かれ図で示す。(図が煩雑になるのを避けるため、ここでの議論に直接関係のない文の直接構成要素以外の成分は省略してある。)

(18)

文		
述部	補語	
<i>gita^</i>	<i>tau=nan.</i>	
see	person=that	「その人をみなさい」

次に副詞の例文として、上に挙げた(19)(20)を再掲する。

(19) *laó-laó^* *nya* *bakranté.*
 slowly 3 speak 「彼はゆっくり話す。」

(20) *nya* *bakranté* *laó-laó^*
 3 speak slowly 「彼はゆっくり話す。」

副詞は多くの場合、単独で副詞成分を形成する。副詞成分は(19)のように文の他の構成要素の前に現れる場合もあれば、(20)のように文の他の構成要素の後に現れる場合もあるが、

18 自動詞の場合と同様、(註16で述べたように)動詞句内に現れる主要部以外の要素は、ここで扱う「特に強い強勢」の現れ方には関与しない。

2.3 単語の強勢

自発的な発話では(19)のように文頭に現れることが多い¹⁹。よって、副詞はそれが単独で形成する統語的単位である副詞成分を直接支配する統語的単位である文において、後続する要素を持つことが多いということになる。このことを枝分かれ図で示す。(ここでも図が煩雑になるのを避けるため、文の直接構成要素以外の成分は省略した。)

(19)

文

副詞成分	補語	述部
<i>laó-laó</i> [^]	<i>nya</i>	<i>bakranté.</i>
slowly	3	speak 「彼はゆっくり話す。」

以上のことから、他動詞および副詞は、それが単独で形成する統語的単位のうち最も高い階層にある統語的単位を直接支配する統語的単位内の末尾以外の環境に現れることが多いといえる。つまり、自動詞または名詞が下降音調を伴って現れるような統語的位置に現れることが多いのである。他動詞および副詞が常に下降音調で現れるのは、このことと関係があると考えられる。

19 第5章の7で示すように、副詞の一部は述部の前にのみ現れる。また、述部の前後いずれにも現れうるものも、自然な発話では述部の前に現れることが多い。